

特別講演 薬剤耐性対策の事例紹介

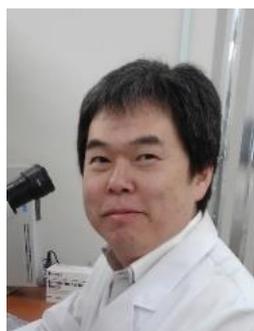
演題1：小動物臨床現場での状況と AMR 対策について



むらた動物病院、獣医臨床感染症研究会 VICA、
東京農工大学農学部附属国際家畜感染症防疫研究教育センター
村田 佳輝 (むらた よしてる)

近年、動物においても抗菌薬療法の発達により、薬剤耐性菌・薬剤耐性真菌が多く見られるようになってきた。現在、獣医学小動物領域(犬・猫)においては薬剤耐性菌としては、MRS(4 菌種)、ESBL(3 菌種)、MRSA(1 菌種)の3種だけが検出されている。近年多くの動物病院においては、通常診療において重症感染症以外でも広域抗菌薬や長時間作用型抗菌薬の初回からの使用が多く、最近このことが原因と考えられるメチシリン耐性ブドウ球菌(MRS)、基質拡張型 β ラクタマーゼ (ESBL) 産生大腸菌の増加が多くみられるようになり、問題視されている。真菌感染症においては、カンジダ症は、*C. albicans*とされていたが、近年人と同様に動物においても *non-albicans Candida* を原因菌とする症例が多くみられるようになっており、これらは耐性を獲得しているものも多く、今後人獣共通感染症として問題視されている。

演題2：主な薬剤耐性菌の検査法と薬剤感受性率（アンチバイオグラム）の利用方法について



サンリツセルコバ検査センター、獣医臨床感染症研究会 VICA
露木 勇三 (つゆき ゆうぞう)

医療分野の薬剤耐性菌は、MRSA による院内感染が長年の問題であった。近年は、VRE、MDRP、MDRA、ESBL、CRE、CPE といった耐性菌が増加傾向にある。医療分野で問題視している多剤耐性菌の多くは伴侶動物医療分野では流行していないものの、メチシリン耐性ブドウ球菌属 (MRS) と基質拡張型 β -ラクタマーゼ (extended-spectrum β -lactamase : ESBL) については医療分野より高率に検出されている。今回、主な薬剤耐性菌の検査法と薬剤感受性率（アンチバイオグラム）の利用方法について報告する。

市民公開講座 野生獣と人獣共通感染症の現状と課題

～新型コロナウイルスを中心に～



東京農工大学農学部附属国際家畜感染症防疫研究教育センター センター長
水谷 哲也 (みずたに てつや)

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大がとまりません。現在は人から人へ感染していますが、もともとこのウイルスはコウモリや野生動物から人に感染してきた人獣共通感染症です。そして、現在は人から伴侶動物へ感染し、ミンク農場で変異したウイルスが人に感染した事例もありました。さらに、アメリカでは野生のミンクからも新型コロナウイルスが検出されています。豚熱では野生の猪への感染が清浄国への復帰を妨げています。

新型コロナウイルスにおいても野生動物における蔓延は終息を遅らせることとなります。このことは私たち獣医学に携わる者の仕事です。さらに重症熱性血小板減少症候群ウイルス (SFTSV) も北上を続け静岡県まで侵入してきました。SFTSV が関東に侵入する日はそれほど遠くないかもしれません。講演では私たちの研究センターの新型コロナウイルスや SFTSV の取り組みをご紹介します。どのようにこれらの課題を克服すべきかについて解説いたします。